

総合大学における吹奏楽の「授業化」に関する一考察I

—宇都宮大学基盤教育科目「管打合奏演習」を事例にして—

高島 章悟

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第10号 別刷

2023年8月31日

総合大学における吹奏楽の「授業化」に関する一考察[†]

—宇都宮大学基盤教育科目「管打合奏演習」を事例にして—

高島 章悟
宇都宮大学共同教育学部*

日本の国立大学における一般教養科目（宇都宮大学の場合は基盤教育科目）のように学部を超えて全学的に開講される授業の中で、「吹奏楽」の授業を開講させていくという目的から、筆者は基盤教育科目『管打合奏演習』という授業科目名で吹奏楽（ウィンド・オーケストラ）の形態を取った合奏の授業を開講した。定時時間による授業展開をしたため、かなり過密なスケジュールでの運用となったが、一般公開の演奏会形式による発表を行うことができた。本稿は、授業開講までの経緯、授業の運用と課題、演奏会形式による成果発表の実際、そして今後の課題について述べたものである。

キーワード：吹奏楽、授業、楽曲、施設、プロジェクト

1. はじめに

日本における現代の吹奏楽は木管楽器（主にフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット）、金管楽器（主にトランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ）、打楽器（主にスネアドラム、バスドラム、ティンパニ、グロッケンシュピール、シンバル）、弦楽器（コントラバス）に分類され、単音の楽器が多いことが特徴であると言える。つまり、吹奏楽という合奏の形態は単音の楽器（演奏者）同士がアンサンブル（原意は「一緒に」「共に」という意味。音楽では一般的に「重唱」「重奏」のこと）という「合わせる」行為からコミュニケーションを取りながら一つの楽曲（音楽）を作ることにあるという性質を持っていると考えられる。そこで筆者は、学部の枠組みを超えて全学的に楽器の経験者を中心に集め、コミュニケーション能力を高めながら一つのものを作り出すことを目的とした「授業」として確立することが可能かどうか検討した。

その結果、基盤教育科目が全学の授業であることに着目し、2013年に『器楽合奏概論』という授業名で講義形式による合奏の授業を展開した。シラバスは以下の通り（資料1）。

資料1

授業科目名	器楽合奏概論				
	An introduction to ensemble				
授業時期	後期	曜日・時間	月・5・6	時間割コード	0343017
所属学部等	基盤教育	科目所属学部の区分	全人可	単位数	2
科目区分	教育科目	単位数	2	授業形態	講義
担当教員名	*高島 章悟				
電話番号	028-649-3302	電子メール	takashima@cc.utsunomiya-u.ac.jp		
オフィスアワー	(月) 16:10~17:40				
【授業の目的】	種々な合奏の形態と楽器の知識について理解する。				
【授業の到達目標】	大規模からの編成に習熟するまでソロ、ハーモニー、伴奏の位置付けを理解する。				
【学習・教育目標への関連】	基盤教育科目「音楽」科目であり、合奏の中で楽器同士が、楽譜上で共有していることを認識する。				
【前課とする知識、関連する科目等】	楽譜に関する基礎知識があることが望ましい。				
【授業の具体的な進め方】	楽譜の鑑賞を通じて、楽譜と向き合ってもらいながら、進めていく。				
【授業計画】	第1回 オリエンテーション、授業の概要 第2回 種々の合奏(1) 第3回 種々の合奏(2) 第4回 音楽史(1) 第5回 音楽史(2)、音楽とその種々な動き(1) 第6回 音楽とその種々な動き(2) 第7回 ハーモニー(1) 第8回 ハーモニー(2) 第9回 ハーモニーとその種々な動き(1) 第10回 ハーモニーとその種々な動き(2) 第11回 ソロ(1) 第12回 ソロ(2) 第13回 楽譜における楽譜の役割(1) 第14回 楽譜における楽譜の役割(2) 第15回 楽譜における楽譜の役割(3)				
【教材】	【教科書・参考書・教材等】 授業で使用する。				
【成績評価】	授業中実技のレポート(30%)、授業終了時のレポート(30%)を提出して評価する。				
【学習上の留意】	授業以外でもあらゆる形態の作品を鑑賞する機会を設けること。				

[†] Shogo TAKASHIMA*: A Study on the "Classification" of Symphonic Band at a University I

Keywords: windmusic, class, musical composition, institution, project

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
(連絡先: takashima@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

2-2. 会場の確保

演奏会の企画は全てとていいほどそうだが、先ずは開催する会場の確保が必要不可欠である。

授業の一環としての発表であることから、筆者は大学内にある二つの施設を検討することとした。

・大学会館多目的ホール

280席。内160席が移動観覧席となっており高低差のある座席で見通しがよい。電動式となっているため様々な用途に応じて使用が可能である。また、同じフロアにハイビジョンシアター「ライブ」という防音の施設も完備され、楽器演奏（音を出すため）の準備のために使用することが可能であることも確認できた。さらにトークルーム（I・II）という施設があり、36名と20名がそれぞれ利用できる。音を出すことは難しいが、演奏会のための使用としては楽屋のように利用できることが考えられる。化粧室も1階に1か所と2階に1か所あり、エレベーターも完備されている。

・峰ヶ丘講堂

2階建ての吹き抜けとなっており、延床面積：587㎡（1階367㎡、2階220㎡）。テーブル30台、椅子180脚、音響設備（マイク、マイク用アンプ）、プロジェクターが完備されている。椅子を講堂外より調達することにより約300人（1階：約200人、2階：約100人）の収容は可能であると考えられる。照明も明るく多目的に使用が可能となっている。また、1階に3か所、2階に3か所小部屋があり、音を出すための部屋または楽屋として利用できると考えられる。隣に化粧室が1か所しかないことから、発表会当日の混雑が予想された。そこで企画広報課よりUUプラザの2階にあるコミュニティフロアの利用も検討するとよいと情報をいただいた。音を出すことは不可能だが、楽屋として利用することで、完備されている化粧室の利用と、さらには設置されているエレベーターも使用が可能となる。

以上のように、両施設ともほぼ同様の条件が整っていることから、筆者は残響（音が出た後の響きの長さ「時間」）がどの程度あるのか、それぞれの施設でストップウォッチを使用し以下の方法で確認することとした。

- ・手を叩く（叩いた瞬間から施設の空間の中で響きが消えるまでの時間）10回計測して平均を出す。
- ・Tubaで音を出す（息を吸った後、息を吐くことにより唇が振動し音が出る瞬間から施設の空間の

中で響きが消えるまでの時間）10回計測して平均を出す。

Tubaを使用する理由は筆者が専門としている楽器であり、また吹奏楽器の中で特に倍音が大きい楽器であるためである。結果は以下の通り（表5、表6）。

表5 大学会館多目的ホール（少数第3位四捨五入）

回数及び楽器 （時間「秒」）	手を叩く （秒）	Tubaを使用 （秒）
1回	0.71	0.81
2回	0.79	0.78
3回	0.68	0.8
4回	0.66	0.85
5回	0.7	0.71
6回	0.81	0.75
7回	0.65	0.73
8回	0.86	0.83
9回	0.71	0.81
10回	0.76	0.73
平均	0.73	0.78

表6 峰ヶ丘講堂（少数第3位四捨五入）

回数及び楽器 （時間「秒」）	手を叩く （秒）	Tubaを使用 （秒）
1回	1.4	1.95
2回	1.26	1.85
3回	1.41	1.83
4回	1.48	1.9
5回	1.48	1.86
6回	1.58	1.81
7回	1.65	1.86
8回	1.61	1.88
9回	1.4	1.97
10回	1.5	1.81
平均	1.48	1.87

この結果、残響の長い峰ヶ丘講堂を利用することとした。

2-3. 楽曲の選択

筆者は楽曲の選択に関して、大学の授業として相応しい楽曲とは何かを検討した。

現代の吹奏楽は（1）行進曲（2）クラシック編曲作品（3）吹奏楽オリジナル作品（4）ポップス・ジャズ編曲作品など、様々な作曲家、編曲家によって多数出品、出版されていることから、前述したジャンルをそれぞれ1曲は取り入れることを考えた。

そこで、音楽大学やプロフェッショナルの吹奏楽団そして自衛隊が取り上げている楽曲についてCD等約400枚を調査した。その結果、筆者は次の条件を考慮した楽曲を選択した。

- ・大学に関連する楽曲
- ・コンクールで多く取り入れられている楽曲
- ・コンクール以外で多く取り入れられている楽曲

- ・音楽科教育に精通している作曲家の作品
- ・歴史的に吹奏楽によってジャンルを開拓した編曲家による作品

選択した楽曲は以下の通りである。

(1) 行進曲

ジェリー・ピリック作曲：コンサートマーチ「ブロックM」

- ・作曲家の母校であるミシガン大学のナイトコンサートのために書かれた作品である。「M」はミシガン大学のエンブレムにもなっている頭文字。

(2) クラシック編曲作品

マルコム・アーノルド：管弦楽組曲「第六の幸運をもたらす宿」

- ・1958年に公開されたアメリカのハリウッド映画「The Inn of Sixth Happiness」の音楽をアーノルドが管弦楽に作曲し、瀬尾宗利氏が吹奏楽曲に編曲した。1996年全日本吹奏楽コンクールにて文教大学が取り入れて以来、多くの団体が演奏している人気曲の一つ。

(3) 吹奏楽オリジナル作品

①アルフレッド・リード作曲：音楽祭のプレリュード

- ・洗足学園音楽大学客員教授を務めたアルフレッド・リード氏が、1957年オクラホマ州イニードのフィリップス大学にて開催されるトライ＝ステート音楽祭25周年記念に作曲した。1970年の全日本吹奏楽コンクールにこの楽曲が採用されたことによりリード氏が日本で広く知られるようになった貴重な楽曲。

②ロバート・ジェイガー作曲：シンフォニア・ノビリッシマ

- ・1962年から1963年にかけて、当時婚約中であったシル夫人に捧げたジェイガーの代表的な作品である。日本でも歴史的に人気が高く、全日本吹奏楽コンクールにおいても13回演奏されており、1969年の神奈川大学を始め支部大会においても多数の団体がこの楽曲を取り入れている。

③ジェームス・スウェアリンジェン作曲：ロマネスク

- ・吹奏楽において重要な作曲家の一人であるジェームス・スウェアリンジェンの代表的な作品の一つ。彼は音楽教師でもあり数多くのスクールバンド向けの作品を残している。現在はオハイオ州のキャピタル大学において音楽教育学科の教授を務めている。彼の作品は1980年代から90年代にかけて日本の吹奏楽シーンに大きな影響を与え、メロディが親しみやすい、わかりやすいなど現在でも

吹奏楽の原点的な楽曲として、コンサート等で取り入れられている。

(4) ポップス・ジャズ編曲作品

①ヴァン・マッコイ作曲：アフリカン・シンフォニー

- ・1974年に発表したアルバムの中に収録された曲である。オリジナル版は、ディスコミュージックの一つとして発表された。今回演奏される吹奏楽版は、吹奏楽ポップスの父と称された作編曲家、岩井直博氏により編曲され「ニュー・サウンズ・イン・プラス第5集」に収録されたことにより吹奏楽曲の一つとして認知されるようになった。

②ラファエル・エルナンデス作曲：エル・クンバンチエロ

- ・タイトルの『El Cumbanchero』とは「クンバ（口の広い杯）を叩く男」という意味があり、お祭りの日に通りで開催されるドンチャン騒ぎの情景を表現した曲である。ラファエル・エルナンデスは3000曲以上もの曲を作曲したプエルトリコの国民的作曲家であり、この曲は南米などでヒットしたラテン音楽を代表する楽曲でもある。吹奏楽版はアフリカン・シンフォニー同様、岩井直博氏により編曲されている。

2-4. オリエンテーション

(1) 時期

まず峰ヶ丘講堂の使用状況を確認した。授業の発表という位置付けから、発表会の日程は2016年2月9日（火）とし、平日であるため発表時間（開演時間）を18時に設定した。その日程から遡ってオリエンテーションを行う必要があった。これは10月からの後期授業開始に合奏の授業ができるようにするためである。オリエンテーション時に楽譜を配布し、その後授業開始までの間、学生の練習時間を確保することが可能となる。また、人数の少ない（またはいない）楽器が出てきた場合は学外より賛助出演者の確保も必要となる。さらには8月の試験終了後、学生は夏期休暇期間に入ることから、オリエンテーションは8月の前期試験終了日の2015年8月7日（金）の9-10時限終了後に前倒しして行うこととした。以降、後期の履修登録期限日まで、履修または参加を希望する学生が出た場合は筆者が個別に面談・対応することとした。

(2) 履修及び参加学生

本来後期の授業は後期の第1週にオリエンテーションを行うこととなっているが、前述の理由により前期の試験終了後に行うこととなった。当時オン

ライン対応のシステムもなかったことからオリエンテーションに参加した学生、そして都合によりメールにて参加希望の学生が存在した。結果、後期の履修登録期限日まで43名の学生が参加（受講）することとなった。所属学部及び学年の内訳は以下の表のとおりである（表7）。

表7

学部名	1年	2年	3年	4年	合計
国際	3	0	0	1	4
教育	13	2	2	10	27
工	7	0	1	1	9
農	3	0	0	0	3
合計	26	2	3	12	43

楽器別では以下ようになる（表8）

表8

楽器名	人数	楽器名	人数
フルート	6	オーボエ	2
クラリネット	7	バス・クラリネット	1
アルト・サクソ	2	ファゴット	2
テナー・サクソ	1	バリトン・サクソ	1
トランペット	5	ホルン	5
ユーフォニアム	1	トロンボーン	3
パーカッション	5	チューバ	2

これに内地留学生1名がクラリネットに加わる。さらにトランペットの経験年数が浅めであること、トロンボーンとユーフォニアムの人数が不足したことから、学外よりトランペット3名、トロンボーン1名、ユーフォニアム1名、楽曲によってはピアノ、チェレスタ、エレキベースが必要とされるため、ピアノ専攻の学生及び教員による賛助の出演を依頼した。

(3) 学生による役員の設定

オーケストラや吹奏楽では、プロフェッショナル、アマチュア問わず、コンサートマスター、首席奏者、裏方の仕事として、ステージマネージャーやライブラリアンなど役員（役職）を設定しそれらの組織を運用している。本授業においても、参加学生が組織の一員としての自覚を持つこと、学生間の連携を強め運用を円滑にすることを目的として、上記に習い以下の役員を設定した。

- ・コンサートマスター（コンサートミストレス）
- ・インスペクター（木管・金管それぞれ1名）
- ・ライブラリアン（木管・金管それぞれ1名）
- ・パート（楽器によって少人数の場合は同属楽器のセクション）リーダー

3. 授業の実際

3-1. 演奏時間と難易度（グレード）の確認

実際に授業を進めていく上で、1回の授業で全楽曲を演奏することは授業の準備と片付けも含めると到底難しい。そのため演奏時間と難易度を確認し（表9）、シラバスでも示しているように発表に近づくにつれ楽曲を増やしていくように計画した。尚、「第六の幸運をもたらす宿」については三つの楽章で構成されているため、それぞれ分けて演奏時間を確認した。

表9

楽曲名	演奏時間	難易度
ブロックM	3分30秒	3
第六の幸運をもたらす宿I	3分30秒	5
第六の幸運をもたらす宿II	3分40秒	5
第六の幸運をもたらす宿III	5分30秒	5
音楽祭のプレリュード	4分30秒	5
シンフォニア・ノビリッシマ	6分30秒	4
ロマネスク	3分20秒	2.5
アフリカン・シンフォニー	4分00秒	3
エル・クンバンチェロ	4分00秒	4

※演奏時間はおよその時間

※難易度は楽譜の出版会社によって掲載されているものをそのまま表記した数字である。英国王立音楽検定のグレード（ABRSM）を参考にすると、概ね基本的には以下のような解釈ができると思われる。

- 1 = very easy とてもやさしい
- 2 = easy 易しい
- 3 = of moderate difficulty 普通
- 4 = difficult 難しい
- 5 = very difficult とても難しい
- 6 = professional プロフェッショナル

シラバスに記載されている①～⑬オリジナル作品に関しては「ブロックM」と「音楽祭のプレリュード」、「シンフォニア・ノビリッシマ」と「ロマネスク」というように2曲をカップリング、楽曲演習⑤～⑬のアレンジ作品に関しては「第六の幸運をもたらす宿」のI,IIとIIIに分け、楽曲演習⑨～⑬のポピュラー作品に関しては「アフリカン・シンフォニー」と「エル・クンバンチェロ」をそれぞれ分けて、原則交互に隔週で行うこととした。

3-2. 時間割（時間帯）について

2015年度は、定時での開講の場合月曜日に設定する規定から、2013年度の『器楽合奏概論』と同様に後期の月曜日5-6時限（12時50分～14時20分）

に開講することとした。実際に開始してから、最初のうちは音を出すためのウォーミングアップや合奏のための設営準備で最低でも20分の時間を要した。また、終了10分前には演奏後の片付け作業も加わり、演奏のための時間は実質1時間程度であった。その後、筆者と授業開始前の昼休みの時間帯に授業会場で練習を希望している参加学生の数名が事前に準備をするようになり、1時間20分の演奏時間を確保することができた。以降、それにより授業が徐々に円滑に進んでいくようになり、授業の13回目以降は楽曲全体の演奏までできるようになった。しかし次の7-8時限に授業がある学生も多数おり、終了前の後片付けは、常に慌ただしい様子も伺えた。

3-3. 大型楽器の練習場所について

ほとんどの学生が個人で所有している楽器を使用している。それ以外は大学の備品を借用しそれを使用する。持ち運びが可能な楽器に関しては、練習室等大学の施設で音を出すことが可能な場所で練習できる。ティンパニ、バスターム、木琴及び鉄琴系の鍵盤楽器など大学の備品で且つ持ち運びが困難な楽器に関しては、他の授業の妨げにならないよう、学生とスケジュールを調整し、筆者の研究室を練習場所として解放することとした。

4. 成果発表に向けて

4-1. フライヤーの作成

授業発表を演奏会形式による公開とすることから、タイトルを検討することとなった。基盤教育センター長に相談したところ、目標を達成するための業務として「プロジェクト (Project)」を入れてはどうかと提案があった。筆者はこれを採用しタイトルを「宇都宮大学ウインドアンサンブルプロジェクト」とし、前述における楽曲選択の条件から「吹奏楽名曲紀行」とサブタイトルを付けた。そして、学内外に周知するためにフライヤーを作成し印刷を依頼した(資料3)



4-2. 平台の作成

使用する峰ヶ丘講堂の備品は、以下の通りである。

テーブル 30台

椅子 180脚

音響設備 (マイク・マイク用アンプ)

プロジェクター 1台

ドラムコード 1台

そのため、後方に着席する奏者が指揮を見やすくするための段差、すなわち平台が必要となる。公共のホール等で使用されている平台も市販されているが、1台につき2万円を超えるため、複数台の購入は予算内で賄うことが難しいと判断した。そこでホームセンターで板と角材を購入し、作成することとした。1台あたりのサイズは、横182cm・縦91cm・高さ10cm(写真1)。これを講堂で合奏形態を組み立てるときに必要な枚数と予備を含め、合計11枚を作成することができた(写真2)。費用も4万円以内に収まった。

写真1



4-3. 不足している楽器の購入について

資料2のシラバスに記載されているが、授業計画の10回目よりポピュラー作品演習が始まる。その前にドラムセットのシンバル系（一般的にはサスペンデッドシンバル2台とハイハット1台が付いている）以外のタム（通常はハイタム・ロータム・フロアタムの3台）とスネアドラム、バスドラムの購入が必要となった。ソナー製やパール製、ラディック製はシンバル系の楽器も含めたセットのみでの販売に対し、ヤマハ製はタムとバスドラムが別売りでの購入が可能であったため、ヤマハ製のものを選択し購入した（写真2）。結果、オールセットで購入すると12万円程度かかるところ、およそ半額の6万円程度で購入することができた。

写真2



4-4. 当日の備品運搬について

大型打楽器（ティンパニ、バスドラム、木琴及び鉄琴系の鍵盤楽器）と平台以外の備品に関しては、大学の公用車2台を使用して運搬することができたが、大型打楽器と平台は、公用車を使用し

が不可能であった、そこで大学の備品にある台車複数台（最大3台）を使用して以下のように運搬することとした。

【平台】台車を2台使用し、向かい合わせにする。平台をその上に寝かせた状態で重ねて運搬した。

【ティンパニ】SS,S,Mサイズは台車を2台、L,LLサイズは3台をそれぞれ同じ向きにつけ、2台ずつ載せて運搬した。

【バスドラム】台車を2台使用し、向かい合わせにする。それぞれのの上にバスドラムについているキャスターを載せて、キャスターに付いているストッパーをロックして運搬した。

【木琴及び鉄琴系の鍵盤楽器】台車を3台使用し、鍵盤の一番短い（一番音の高い）方に1台、一番長い（一番低い）方に2台同じ向きにつけた状態にする。それぞれの台車の上に楽器に付いているキャスターを載せ、ストッパーをロックして運搬した。

5. 成果発表の実際

前述の表7の演奏時間を合計すると38分30秒。楽曲間に楽曲や授業に関する説明などを入れておよそ1時間のプログラムとなる。18時開演予定のため、ゲネプロは15時より17時までとした。オープニングで演奏するコンサートマーチ：ブロックM以降のプログラム（楽曲順）は以下の通りである（資料4）。

資料4

◇プログラム◇

◆音楽祭のプレリュード／アルフレッド・リード◆

A Festival Prelude/Alfred Reed

◆シンフォニア・ノビリッシマ／ロバート・ジェイガー◆

Sinfonia Nobilissima/Robert Jager

◆ロマネスク／ジェイムス・スウェアリンゲン◆

Romanesque/James Swearingen

◆第六の幸運をもたらす宿より／マルコム・アーノルド(瀧尾宗利編曲)◆

1. ロンドン・プレリュード 2. ロマンティックな間奏曲 3. ハッピーエンディング
The Inn of the Sixth Happiness/Malcolm Arnold (arr. Munetoshi Senoo)
 I. London Prelude II. Romantic Interlude III. Happy Ending

◆アフリカン・シンフォニー／ヴァン・マッコイ(岩井直博編曲)◆

African Symphony/Van McCoy (arr. Naohiro Iwai)

◆エル・クンバンチエロ／ラファエル・エルナンデス(岩井直博編曲)◆

El Cumbanchero/Rafael Hernández (arr. Naohiro Iwai)

楽曲間の休憩は入れないこととした。理由はプログラムが1時間と通常のコンサートに比べ短時間であること、また片付け作業終了後、帰宅する学生の安全への配慮のためである。当日の来場者数は138名。本プロジェクトは19時に終演し、早急に片付け・現場復帰作業に取り掛かった。最終的に全ての作業が完了したのは21時であった。

6. 課題と考察

6-1. 開講時間について

2015年度は定時の時間帯（具体的には月曜日の5-6時限12時50分～14時20分）にて授業を行ったが、準備や片付け、特に大型楽器を担当する学生にとって、そのために費やす時間が大きな負担となる。さらに次の授業への移行などがあり時間的に全く余裕がないことから、次回以降は不定時科目に設定することを視野に入れ検討する必要がある。授業の組立を柔軟にし、時間に余裕を持って対応できることが重要であると考えた。

6-2. 楽器及び備品の運搬方法について

大型打楽器と平台に関しては、公用車に入らず、今回は台車を使用しての運搬となったが、時間が大幅にかかったことと、他の授業等で台車を使用する際に不足し、支障をきたす可能性がある。このことから、次年度は農学部が所有している1.5tのトラックの借用が可能かどうか検討することとした。借用が可能であれば、大型楽器のみならず、その他の備品も含めて運搬に関する作業がより円滑になることが考えられる。

6-3. 成果発表の時間帯について

平日の夕方から夜にかけての本番となったが、その後の片付け・現場復帰作業に費やす時間を考えると、かなり過密なスケジュールとなった。次年度では土曜又は日曜などの休日に設定し、午後2時～3時頃に開催することを検討する必要があると考えられる。

結びに

今回のプロジェクトの参加者は、最終的に50名を超える大編成の合奏体となった。今日、少子化の影響で、吹奏楽の世界においても大編成での合奏を体験できる機会が非常に少ない。本授業を通じて今後様々な機関と連携し、プロジェクトの存在を発信することによって、学内外から幅広く参加が可能と

なるよう努めていかなければならないと考えている。

また、前述した課題も浮き彫りとなった。次年度以降継続させていく上で、これらの課題への対策が重要な要素となる。特に6-3において述べたように午後開催に設定することができれば、終演後の片付けにも時間的に余裕が生まれるだけでなく、学生やプロジェクトに関わった方々によるレセプションを企画できることも考えられ、さらにコミュニケーションを深めていくことが期待できる。筆者はそれらの改善に取り組み、次の実践に向けて準備をしていく。

参考文献

- [1] 佐伯茂樹『オーケストラと吹奏楽—合奏と鑑賞の楽しみ』小峰書店, 2011
- [2] 佐伯茂樹『楽器から見る吹奏楽の世界』河出書房新社, 2009
- [3] 東京フィルハーモニー交響楽団監修『楽しいオーケストラ』小学館, 2018
- [4] 戸ノ下達也『日本の吹奏楽史1860-2000』青弓社, 2013
- [5] Billk, Jerry H. *Block M Concert March for Band*, Mills Musoc, 1955
- [6] Reed, Alfred. *A Festival Prelude*, Hal Leonard, 1962
- [7] Jager, Robert. *Sinfonia Nobilissima*, Theodore Presser, 1964
- [8] Swearingen, James. *Romanesque*, C.L.Barnhouse, 1982
- [9] マルコム・アーノルド, 管弦楽組曲『第六の幸運をもたらす宿』, 瀬尾宗利編, オクト社, 2001
- [10] ヴァン・マッコイ, 『アフリカン・シンフォニー』, 岩井直溥編, ヤマハミュージックメディア, 1977
- [11] ラファエル・エルナンデス, 『エル・クンパンチェロ』, 岩井直溥編, ヤマハミュージックメディア, 1995
- [12] イーショップ教文館2023.2月28日アクセス, <https://shop-kyobunkwan.com/page-36.html>

2023年3月29日 受理

A Study on the "Classification" of Symphonic Band at a University I

Shogo TAKASHIMA